

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第591号 平成25年8月9日

## 終戦のエンペラー

「終戦のエンペラー」は、現在公開中のハリウッド映画で、物語は、太平洋戦争直後における昭和天皇の戦争責任問題を軸に展開して行きます。

この映画については、「日本とアメリカの史実をもとに描く歴史サスペンス」という触れ込みですが、歴史の結末を知っている者としては、特段これがサスペンスとは思えません。ただ、天皇という存在が外国人にとっては非常に理解し難い存在なのだなという事は、分かった気がします。

映画は勿論、史実とフィクションを織り交ぜており、また、昭和天皇の責任問題の調査を命じられた主人公と日本人女性とのラブストーリーを絡ませながら展開して行くという娯楽作品ではありますが、描き方はまじめで、見方は偏っていないという印象を受けました。

1945年8月、日本が連合国に降伏し、第2次世界大戦は終結します。

ダグラス・マッカーサー元帥率いる連合軍が日本に進駐し、GHQによる日本統治が始まり、A級戦犯の逮捕も行われます。そうした中、日本文化に詳しいボナー・フェローズ准将は、太平洋戦争の真の意味での責任者は一体誰なのかを調査するようマッカーサー元帥から極秘に命じられ、独自に調査を開始します。連合国側は昭和天皇を戦犯として裁く事を望みますが、マッカーサー元帥には、天皇を戦犯として処刑する考えはなかったようです。

フェローズ准将は、調査の結果、天皇の戦争責任を問う証拠は見つからなかったとの報告をマッカーサー元帥に行い、その後、天皇とマッカーサー元帥との会見が行われます。

映画では、フェローズ准将にはアヤという日本人の恋人がいるのですが、二人の愛は戦争によって引き裂かれ、しかも彼女は、米軍の爆撃により既に亡くなっているという、国境を隔てた愛の物語が描かれています。

以上が、映画の大まかなストーリーですが、主人公のボナー・フェローズ准将は、実在の人物です。彼は、日本文化を学び、第2次大戦前、2度にわたって来日しています。そして、マッカーサー元帥と共に敗戦後の日本に上陸します。

映画では、アヤやアヤの叔父がフェローズ准将の日本人の天皇観等に対する理解に大きな影響を与えた様に描かれていますが、これはフィクションです。

彼の日本人に対する理解は、恵泉女学園の創設者である河井道さん、一色（旧姓渡辺）ゆりさんという2人の日本人女性と、何よりもラフカディオ・ハーンが大きな影響を与えた様です。ただ、本稿はその事が主題ではありませんので、フェローズ准将の日本に対する理解は日本人との交流の中で深められたものである事を置いていただければと思います。

さて、旧憲法下における天皇は、神聖にして犯すべからざる存在でした。それだけに、連合国側の人々が、絶対権力者の天皇に戦争責任があると主張するのも分からないではありません。これに対してフェローズ准将は、「天皇の権威は象徴である。明治時代以前は天皇は実際には国を治めていなかった。最強の武家が天皇の上において国を統治していた。各武家は天皇を自らの味方につけようと戦った。だがたとえどの武家が天皇を味方につけようとも、国民が最大の敬意を払うのは天皇であり、天皇以上に国民から愛着を持たれる者はこの国には存在しない」と述べています（岡本嗣郎著「終戦のエンペラー」から）。<続く>（塾頭：吉田 洋一）